

3-2 新南部遺跡群から出土した製塩土器

大坂亜矢子

はじめに

- 1 天草式製塩土器の形態部類と時期比定
- 2 新南部遺跡群出土資料の検討

はじめに

ここで取り扱う製塩土器とは、宇土半島や天草諸島の沿岸部で行われた土器製塩で使用された「天草式製塩土器」（近藤 1974）である。大きく内湾する広口の碗形で細長い脚部がついており、シャンパンガラス（ソーサー型）に近似した形態を呈する。完形品の出土はなく、生産地では脚部、内陸の集落遺跡等、消費地では碗部が多く出土するため、土器製塩後、脚部を打ち欠いて塩の入った碗部が各地にもたらされたと考えている。

新南部遺跡群で出土した天草式製塩土器は、近接する3棟の竪穴住居 S050（3点）、S056（1点）、S057（1点）、及び調査グリット（1点）から出土した合計6点である。これらの天草式製塩土器について、形態を分類し、時期を比定する。

1 天草式製塩土器の形態分類と時期比定

天草式製塩土器の分類には、藤本貴仁氏が提示した天草式製塩土器碗部の編年（藤本 2009）がある。

藤本は、製塩土器の碗部を口縁端部の形態、口縁部から底部にいたるプロポーシオンを、次のとおり3類に分類した。

1 類：底部から口縁部にかけては、円弧状に緩やかにカーブを描き、全体的に丸みを帯びており、口縁部が大きく内湾する。碗中央部が最大径で、碗部高にくらべて碗部径がかなり大きいことから、全体的なプロポーシオンは、ひしゃげた球形状を呈する。口縁端部はa類である。典型的な天草式製塩土器の碗部として知られている。

2 類：底部から中央部にかけては、やや斜め上方に直線的に開いており、上半部は緩やかに内湾する。口縁端部は、a類のものもあるが、多くはb類である。碗部最大径は中央より上部に位置する。

3 類：底部から中央部にかけては1・2類よりも斜め上方（45°前後）に向かって直線的に開き、口縁部に近い碗上部を内側に折り曲げることで内湾させる。碗部全体のプロポーシオンは、口縁部が内湾した鉢形土器状を呈する。口縁端部はb類である。

（藤本 2009）

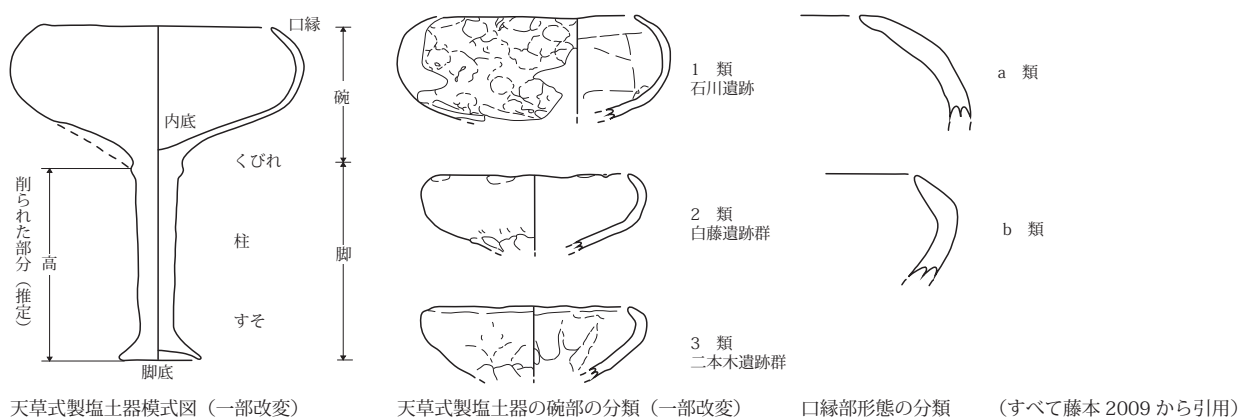


Fig.3-2-1 天草式製塩土器の形態

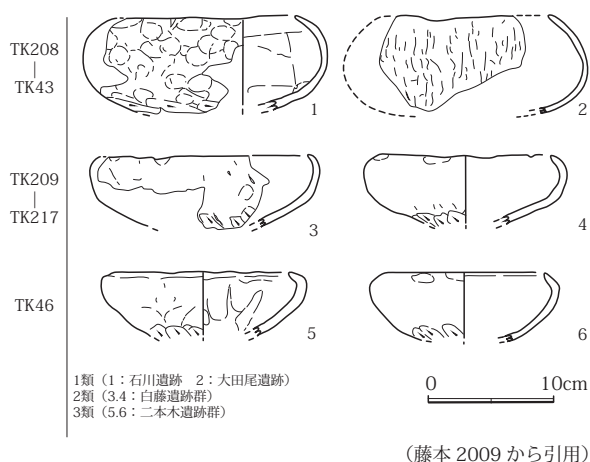


Fig.3-2-2 天草式製塩土器の碗部の編年

なお、藤本は編年観を共伴遺物との関係から碗部と脚部の時期を検討し、対応関係から位置付けている。

また、藤本は、口縁端部を碗中央部から口縁端部にかけて緩やかに内湾する a 類と口縁端部を内側に折り曲げる b 類（藤本 2009）に分類し、碗部最大径の法量変化も併せて検討し、形態は a 類(古相)から b 類(新相)、法量は大（古相）から小（新相）へと変化する傾向が存在することを指摘している（藤本 2011）。

2 新南部遺跡群出土資料の検討

2-1 形態分類

新南部遺跡群から出土した製塩土器を、藤本分類に準拠して、以下のとおり分類する。

RP311、312、313 は、いずれも S050 から出土したものである。RP311 は、中央部から口縁部にかけて欠損しており全体の形状は不明であるが、底部から中央部にかけて斜め上方に直線的に開くことから、2 類に位置付ける。RP312 は、体部の上部付近で口縁部が内側に角度をつけて折れ曲がっている。これらの特徴から、2 b 類に位置付ける。RP313 は全体的に内湾する形状ではあるが、RP312 と同じく体部の上部付近で口縁部が内側に角度をつけて折れ曲がっており、2 b 類に位置付ける。

RP356 は、S056 から出土したものである。底部から水平方向に直線的に開き、口縁部にかけて立ち上がる。2 類に相当すると位置付ける。

RP358 は、S057 から出土したものである。底部か

ら中央部にかけて、斜め上に開いており、上半部は緩やかに内湾する。口縁部は a 類の様相をもつ。よって 2 a 類に位置付けることができる。

RP466 は、竪穴住居が集中する G グリットから出土した。底部から口縁部にかけて円弧状に緩やかにカーブを描き全体的に丸みを帯び、口縁部が大きく内湾する。2 a 類に位置付ける。

以上のとおり、新南部遺跡群から出土した天草式製塩土器は、2 a 類 4 点、2 b 類 1 点、不明 1 点と分類できた。製塩土器の時期は、各製塩土器と共伴する須恵器により TK10 型式、MT85 型式及び TK43 型式の 3 型式に分類され、それぞれ 6 世紀第 2 四半期、6 世紀第 3 四半期及び 6 世紀第 4 四半期の時期に比定される。この時期は、藤本が提示した天草式製塩土器碗部 2 類の時期「TK209 型式～TK217 型式期」（7 世紀以降）より古いこととなる。

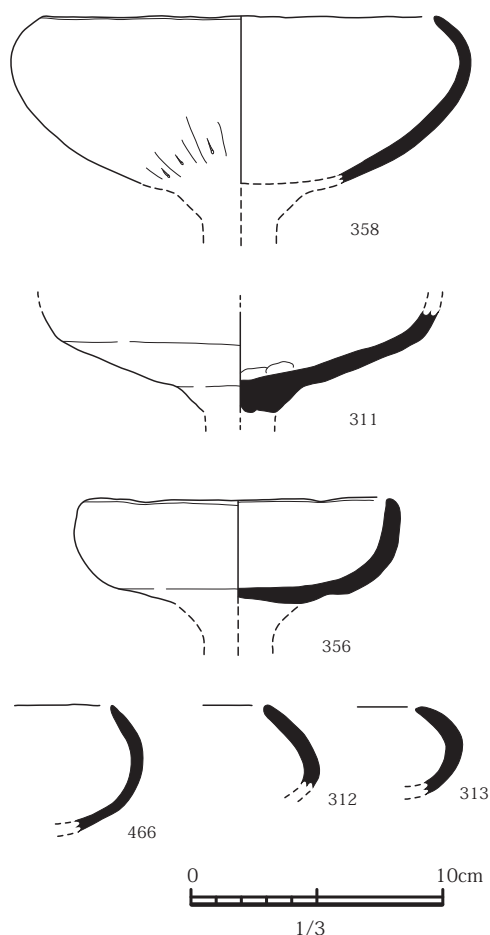


Fig.3-2-3 新南部遺跡群の製塩土器 (RP)

2-2 時期比定

次に、新南部遺跡群出土資料を藤本編年の標識資料と比較し、その形態変遷観と対照することから上記の時期比定について検討を加える。

新南部遺跡群から出土した天草式製塩土器は藤本分類2類に分類されるものであるが、その形態は丸みを帯び、法量は大きい。いずれの資料も明確な口縁端部の屈曲は見られず、体部上部から口縁部を内側に曲げることで内湾させる特徴がある。これら新南部遺跡群と同様の形態的特徴を示しているのは、玉名平野条里跡（古閑前地区）、白藤遺跡群の2遺跡出土資料である。

玉名平野条里跡（古閑前地区）

玉名平野条里跡（古閑前地区）竪穴建物 SI017・SI018 出土の天草式製塩土器は、その形態は全体的に丸みを帯びた体部であり、その口径最大径は約 20cm を測り（76）1 類の最大径平均値（18.5cm）を上回るといった 1 類の特徴を示している。しかし、口縁部にむけて屈曲する特徴をもつ b 類の様相を示し、同じ SI017 から出土した脚部との接合点であった底部 1 点が斜め上方に直線的に開く 2 類の特徴を持つ。これらの特徴から、玉名平野条里跡（古閑前地区）から出土した天草式製塩土器は、藤本編年における 1 類から 2 類及び a 類から b 類への変遷過程に位置している、と考えてよい。その時期は「TK43～TK209 期相当」

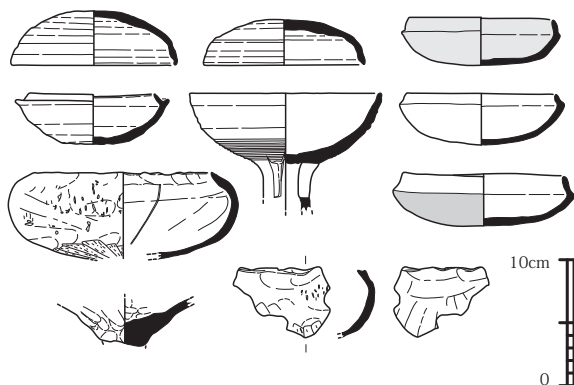


Fig.3-2-4 玉名平野条里跡出土土器

Tab.3-2-1 天草式製塩土器の口径最大径

分類	遺跡(群)	出土位置	最大径 (cm)	備考
1類	沖ノ原	B1区第Ⅲ層	17.5	
	沖ノ原	B1区第Ⅲ層	19.3	
	大田尾	表面採集	19.4	
	石川	10区7号住	17.3	
	石川	13区16号住	19.1	
	玉名平野条里跡	2区17号住	20	古閑前地区
平均18.8				
2類	白藤	23号土坑	16.1	3次調査
	白藤	23号土坑	18.1	3次調査
	上代町	包含層	16.2	1次調査
	上代町	包含層	17.2	1次調査
	新南部	1区S057	18.2	
平均17.2				
3類	二本木	A40号溝	16.3	13次調査
	二本木	A40号溝	16.6	13次調査
	二本木	A40号溝	14.9	13次調査
	二本木	A40号溝	14.9	13次調査
平均15.7				

（藤本2009を一部変更）

（長谷部 2010）と報告されているが、共伴した須恵器は丸みを帯び、坏蓋（71、72）はいずれも口縁が最大径であり口唇部内面にわずかに稜を有する。坏身（75）も短い立ち上がりに受部は短く上を向いている。これらの特徴から MT85 型式に比定できる、と考える。これは新南部遺跡群出土資料よりも古時期に位置づけられる資料である。

白藤遺跡群（第 3 次調査）

次に、白藤遺跡群 3 次 23 号土坑から出土した天草式製塩土器の特徴は、体部上部から口縁部を内側に曲げることで内湾させており、新南部遺跡群出土の天草

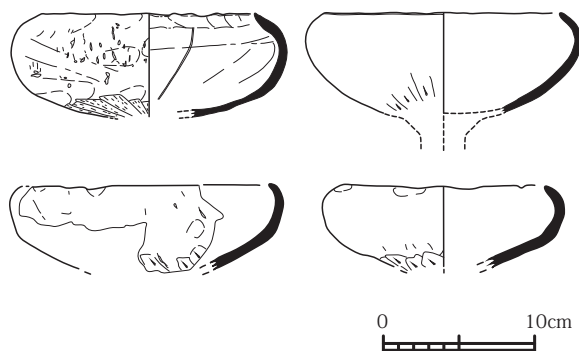


Fig.3-2-5 白藤遺跡群出土製塩土器

式製塩土器によく似ているが、底部から中央部にかけて斜めに直線的に立ち上がる。また、新南部遺跡群出土資料の埴部最大径約 18cm に対して、埴部最大径約 17cm と法量が小さくなる。共伴した須恵器から「TK209 型式～TK217 型式期に相当」(藤本 2009) し、新南部遺跡群よりも新時期に比定される。

上記 2 遺跡と新南部遺跡群との出土資料の比較の結果、玉名平野条里跡(古閑前地区)出土資料、新南部遺跡群出土資料、白藤遺跡群 3 次出土資料は、藤本分類における 1 類から 2 類への変遷過程を示す資料群であり、それぞれ MT85 型式、TK43 型式、TK209 型式～TK217 型式の各型式に分類され、6 世紀第 3 四半期、6 世紀第 4 四半期、6 世紀末～7 世紀前半と位置付けることができよう。この結果は、藤本が指摘した口縁部形態 a 類(古)から b 類(新)の形態変化、及び法量の大(古)から小(新)への容量変化の傾向とも合致したものである。

(引用文献)

近藤義郎、1974、「天草式製塩土器」、『日本塩業の研究』15、日本塩業研究会、東京。

長谷部善一、2011、『玉名平野条里跡(古閑前地区)九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』熊本県文化財調査報告 261、熊本県教育委員会、熊本。

藤本貴仁、2009、「天草式製塩土器の形態変遷試論」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎研究』、熊本大学、熊本。

藤本貴仁、2014、「消費地出土の天草式製塩土器」、『有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究』、熊本大学、熊本。